

入賞者と作品をご紹介します

「第10回詩のまち前橋若い芽のポエム」に 1万7,000編の応募



秋谷委員長が講評を

「第十回詩のまち前橋若い芽のポエム」の選考委員会が九月七日に行われ、一万七千編以上の応募の中から入賞作品が決まりました。小学生、中学生、高校生の各部門で最優秀賞である美棹賞の作品と銅賞までの入賞者、新たに設けた「学校賞」の受賞校を紹介。賞の贈呈式などは十一月十一日(土)に前橋文学館で行われます。問い合わせは生涯学習課 ☎ 890-5825へ。

編以上の増加。全体的なレベルもさらに向上しました。

選考に当たり、まず、推薦委員による予備選考で推薦作品を決定。その後、選考委員による本選考が行われ、入賞作品が決定しました。

美棹賞など 90人が入賞

入賞作品は、三部門で九十編。各部門の入賞者は次のとおりです。——敬称略——

●小学生の部
美棹賞(金賞) 前原みづき(宮

- 城小六年) 銀賞 南マリア(東小一年) 銅賞 森沙也香(駒形小四年) 佳作 十一人
- 中学生の部
美棹賞(金賞) 関龍之介(荒砥中三年) 銀賞 栗原みなみ(七中三年) 銅賞 織内薫(南橋中三年) 佳作 八人
- 高校生の部
美棹賞(金賞) 岩崎竜也(前橋高三年) 銀賞 野崎小百

11月11日に前橋文学館で賞の贈呈式と朗読会



昨年の贈呈式で

□第10回若い芽のポエム贈呈式
日時=11月11日(土)午後1時~1時40分 会場=前橋文学館
□朗読会
日時=11月11日(土)午後1時40分~3時30分 会場=前橋文学館
内容=入賞者と選考委員・推薦委員、一般参加希望者の詩の朗読

学校の取り組み 新たに表彰

今年は十回という節目と、郷土の詩人・萩原朔太郎生誕百二十年を迎えたことを記念し、詩作に対する学校としての取り組みをたたえ、「学校賞」を新たに設定。市内十二校、市外六校が選ばれました。
小学校 桃井小、若宮小、下川淵小、荒牧小、大胡小、滝窪小・滝窪小金丸分校、宮城小、中之条小(中之条町) 中学校 四中、五中、桂萱中、木瀬中、小山三(栃木県)、福岡教育大付属久留米中(福岡県)、渋川中(渋川市)、中之条中(中之条町) 高校 市立前橋、高崎商科大付属高(高崎市)

美棹賞 小学生の部



前原みづきさん 宮城小6年

風船
私が風船をもっていた時、
風船が、「ぼん」と音をたて、われてしまった。
なんだか一瞬地球が静かになった気がした。

美棹賞 中学生の部



関龍之介さん 荒砥中3年

生きる
十年前、父から聞いた話がある。その時父は、インドのムンバイにいた。大きな道の中央分離帯に、裸で寝ている男の子がいる。年は僕と同じ五歳位。あたりまえのように寝ている。インドでは珍しい事ではないのか、誰ひとり気をとめる事なく通り過ぎていく。父は日本にいる僕を思い出して、心がいたんだと話してくれた。辛かったと話してくれた。

僕は思った。服は？ 食べ物は何？ 今晩寝る場所は？ 親は、いないの？ 日本ではない光景だ。それどころか、たくましく生きていくのだろうと... 世界は広い。さまざまな民族、さまざまな環境、そして生活がある。普通に生きていける五歳の子もいれば、寝る家すらない五歳の子もいる。僕はたまたま日本に生まれた。その子はたまたまインドに生まれた。同じ年頃の少年だ。一人の命に差はないはずだ。あれから十年の時が過ぎ、僕は十五歳になった。日本でせいじっぽい生きていく。あの時のムンバイの子は、今、どうしているだろう。どんな十年を過ごしただろう。あの時の父の話、今も時々思い出す。

美棹賞 高校生の部



岩崎竜也さん 前橋高3年

僕の憂鬱
今日も憂鬱な雨が降っている。着心地の悪い合羽を着て、自転車で器用に水溜りをよけながら学校へ急ぐ。黄色い傘の少年とすれ違う。なぜか気になり僕は振り返る。

あの頃は、雨を憂鬱だなんて思っていなかった。僕も同じように黄色い傘をさし、黒いランドセルを重そうに背負い、水溜りを目掛けて歩いて行ったり半ズボンにまでではねをあげながら夢中な僕の長靴の激しい波紋は、僕を映して泥水に染みこんで、一瞬にして泥水に染みこんで、そこにいた小さな虫を飽きずに眺めていた。僕の顔に雨粒があたる事さえ楽しんだ。僕を囲むすべての時間が、ゆっくりゆつたり流れていった。あの頃、何を置いてきてしまったんだろう...

時代反映し 子どもの連帯感

選考委員会終了後、入賞作品決定記者発表が行われ、秋谷選考委員長から次の講評がありました。

□講評のあらまし

「若い芽のポエム」は十回目となりました。今年もたくさん応募があり、詩の土壌が育っていると感じています。寄せられた作品は、それぞれの世代に時代が反映されています。特に、小学生と中学生から優れた、個性を持った作品が寄せられていました。今年も、多くの前橋市の皆さんが、入賞、入選しました。十年目を迎え前橋の地に、詩が芽吹いてきたと考えます。それぞれの作品を見ると、社会や世間に対する視点が違ってきます。一万七千編もの詩には、自分一人という孤独感がなく、作品にお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、先生、級友が登場しています。それは、今の時代を生きている子どもたちが連帯感を持っているのだろうと考えます。生まれてから十年、十五年の歳月の中で、生きているということ、生きていることの大切さを詩にしています。